

「社会的迷惑行為」に関する研究の動向

— 社会的迷惑行為の内容および測定方法、
迷惑行為に影響する心理的要因に着目して —

中 村 真*

要 約

公共場面における迷惑行為の増加を契機に、いわゆる「社会的迷惑行為」が注目されるようになった。本稿の目的は、社会的迷惑行為に関する心理学的研究を概観し、最近の研究動向をまとめることであった。まず、先行研究に基づいて、社会的迷惑行為の定義、測定項目、測定方法、関連する心理的要因を分類・整理した。その結果、これまでの研究で社会的迷惑行為との関連が検討された心理的要因は、社会的態度・価値観、共感性、自己意識、自己制御、羞恥心・恥意識などに大別された。

そして、実証的研究のレビューを通して、社会的態度、自己制御、羞恥心・恥意識が社会的迷惑行為に影響する要因であると考えられること、および他の要因と社会的迷惑行為との関連が明確ではないことが示された。

これらを踏まえて、社会的迷惑行為に関する研究の課題ならびに迷惑行為の抑止に貢献し得る知見を提供するための研究の展望を考察した。

キーワード：社会的迷惑行為、迷惑行為の測定項目、迷惑行為の測定方法、迷惑行為に関連する心理的要因

1. はじめに

電車・バス車内での携帯電話の使用や飲食、化粧行動といったマナー違反行為、禁止区域での喫煙および駐輪など、1990年代の後半頃から、公共の場における迷惑行為が増加したとの指摘が見受けられるようになった。これを契機に、いわゆる「社会的迷惑行為」が注目されるようになり、この10数年の間に心理学分野においてもさまざまな研究が行われている。

言うまでもなく、この種の迷惑行為は、行為者が自らの行動が周囲の他者にどのような影響を及ぼすのかを省みずに、自分の思うがままに振る舞うものであることから、周りの人たちが不愉快な思いをしたり、実際に迷惑を被ったりしてしまう。

快適な社会生活を妨げる脅威といっても過言ではないだろう。残念なことに、2000年代に入ってから、駅やレストラン、電車やバス車内といった不特定多数の見知らぬ人々が居合わせる公共の場において目撃される迷惑行為は増加の一途をたどっているとの印象を拭い去ることはできない。そればかりか、筆者と同じく、大学等の教育機関において教壇で授業を行う立場にある研究者たちが情報交換を行う際に必ずと言ってよいほど話題となる事柄に、学生による授業場面での迷惑行為がある。授業中に授業の内容とは関係のないことをしゃべり続ける者、ヘッドフォンを装着して音楽を聴きながら受講する者、授業中の教室に遅刻して入室したのに大声で友人に呼びかける者など、枚挙に暇がないほどである。

この憂慮すべき事態はなぜ生じたのだろうか。迷惑行為を抑止するためには、何といたっても、その生起要因を明らかにする必要がある。原因を特

2011年11月29日受付

* 江戸川大学 人間心理学科准教授 社会心理学

定することによって、はじめて対策を講じることが可能になると考えられるからである。この問題に対して、これまでに心理学の立場からさまざまな研究の取り組みが行われている。

そこで、本稿では、社会的迷惑行為に関する心理学研究を概観し、その研究動向を把握するとともに、社会的迷惑行為を抑制する心理的要因について検討する。併せて、社会的迷惑行為に関する研究の課題と今後の展望を考察する。

2. 社会的迷惑行為とは何か

— その内容と構造、

および構成要素（項目）—

社会的迷惑行為とは“行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為”と定義されている（吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999；斎藤, 1999）。吉田ら（1999）は、社会的迷惑行為が増加する背景として、①共同体社会の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったこと、そして、②情報化社会への移行により、価値観の多様化が進み、個人の価値判断が優先される社会になったことの2点を挙げた。これは、社会的迷惑行為の蔓延を社会レベルから大局的に説明したものであり、社会規範が守られにくい社会環境になったこと、そして、そもそも人々に社会規範が共有されなくなったことを含意する。

一方で、吉田ら（1999）は社会的迷惑行為を心理学の視点から個人レベルでとらえる試みの先駆けともなった。すなわち、社会的迷惑行為に関して人々が持っている認知構造の検討である。彼らは、社会的迷惑行為が行為者の側の問題であると同時に、その行為を観察した結果、不快な感情が生起したり実際に被害を被ってしまう可能性を有する認知者の側の問題をも含む現象であることを指摘した。そのうえで、社会的迷惑行為の認知的側面に焦点をあて、その認知構造を検討することを通して、社会的迷惑行為の概念を明確にしようと考え、迷惑行為であると考えられる120項目に

ついて、「人々の次のようなふるまいを目にしたとき、あなた自身はどの程度迷惑だと感じるのか」を問う調査を実施した。その結果、社会的迷惑行為は、「タバコや空き缶をポイ捨てすること」、「ガスを抜かずにスプレー缶を捨てること」、「駅付近で、指定された区域外に自転車やバイクを置くこと」など、決められたルールやマナーに反する行為から成る『ルール・マナー違反行為』、および「電車などで、わずかに空いたスペースにむりやり座ろうとすること」、「混雑しているのに、券売機の前まで行ってから、目的地までの料金をさがすこと」、「あらかじめしていた約束を、直前にキャンセルすること」などで構成される『周りの人との調和を乱す行為』の2つの成分に分類されることを示した。

吉田ら（1999）による試みは、社会的迷惑行為の特徴を鑑みて認知者の視点からその構造を把握しようとしたことに意義がある。しかし、できるだけ広範な種類の迷惑行為を網羅しようと試みたせいか、項目数が非常に多い点、同じカテゴリーに含まれるとされた迷惑行為の性質が必ずしも似通っていない点があるなど、尺度としての汎用性が高いとは言えなかった。また、後続する研究では、その主眼が社会的迷惑行為そのものの種類や構造を探求するというよりも、社会的迷惑行為を迷惑と感ずること（迷惑認知）や迷惑行為を許容すること（迷惑許容度）、迷惑行為を実行すること（経験頻度）などに影響する心理的要因を探求することへと研究のパラダイムが急速に絞込まれたことによって、多数の項目を用いて社会的迷惑行為を測定するという研究はあまり見かけなくなった。

とはいえ、以下に述べる通り、吉田ら（1999）で使用された質問項目は、その後の研究において社会的迷惑行為の測定項目を選定する際に参照されることが多く、項目選定の基準となる知見を示した重要な研究であるといえる。

表1と表2は、吉田ら（1999）以降の社会的迷惑行為に関する研究において用いられた迷惑行為の内容（質問項目）を示したものである。表1に示した石田ら（2000）の項目は、吉田ら（1999）

表1 社会的迷惑行為に関する研究において用いられた迷惑行為の内容（質問項目）（その1）

出典	石田ら（2000）	吉田ら（2000），出口（2004），戸田・小林（2007）*
項目	<ol style="list-style-type: none"> 1. 指定された日以外にゴミを出すこと 2. 飲めない人にお酒をすすめること 3. 人混みで、歩きながらタバコを吸うこと 4. 公衆トイレに不愉快な落書きをすること 5. 授業や講演会の途中で、携帯電話の呼び出し音を鳴らすこと 6. いいかげんな計画しか立てずに、登山をすること 7. 電車やバスにただ乗りすること 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電車やバスに不正乗車（ただ乗り，キセル）すること 2. 夜，無灯火のまま自転車に乗ること 3. 火事や事故の現場を見に行くこと 4. 並んで電車を待っている人たちの横から割り込むこと 5. 指定された日以外にゴミを出すこと 6. タバコや空き缶をポイ捨てること 7. 電車やレストランで携帯電話を使用すること 8. 指定された区域以外に自転車やバイクをおくこと

※項目1を除く7つの項目を分析に使用

表2 社会的迷惑行為に関する研究において用いられた迷惑行為の内容（質問項目）（その2）

出典	谷（2006），谷（2008）*	原田・吉澤・吉田（2009）
項目	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電車内で携帯電話で通話する 2. 大きな荷物を置いて通路をふさぐ 3. 電車やバスに不正乗車（ただ乗り，キセル）する 4. 混雑した電車で，空席の前に立ったままにいる 5. 電車内で，携帯電話をマナーモードにしない 6. 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに，入り口付近にいて動かない 7. 乗車時に，列に並ばずに割り込む 8. リュックを背負ったまま満員電車に乗る 9. 電車内や駅のホームにごみを放置する 10. 座席に荷物を置いたり，足を広げて座ったりする 11. かけ込み乗車をする 12. 電車内で物を食べたり飲んだりする 13. 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせずに音楽を聞く 14. まだ降りる人がいるのに，先に乗り込もうとする 15. 電車内で，声の大きさを気にせずおしゃべりする 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 電車の中で友人と盛り上がり，大きな声で騒ぐ 2. 電車内で床に座る 3. ごみを分別せずに捨てる 4. コンビニの前にグループで座り込みながら話をする 5. 歩道いっぱい広がって歩く 6. 電車の中で飲食をする 7. 駅構内で階段や通路に座る 8. 授業中，授業と関係のないことを話し続ける 9. 電車やバスの中で，混雑時につめて座らない 10. ごみや空き缶，ガムなどを道に捨てる 11. 電車内で降りる人を待たずに乗り込む 12. 電車内で足を広げて（前に伸ばして）座る 13. 駅付近で，指定された区域以外に自転車やバイクを置く

※項目3，項目15を除く13個の項目を分析に使用

で用いられた社会的迷惑行為から迷惑認知度の分散が比較的大きいものを選択した7項目である。ただし，項目3と項目6については，元々，その行為を実行する可能性を有しているのは一部の人たちであるという点で項目としての汎用性に疑問点がある。

また，表1の吉田ら（2000），出口（2004），戸田・小林（2007）の8項目は，やはり吉田ら（1999）で用いられた迷惑行為の中から迷惑認知にバラエティがあると判断された項目群（吉田ら，

2000）である。これらの8つの項目は，誰もが観察する（あるいは経験し得る）可能性が高い行為であると同時に，場面が特定の状況に限定されていないという点において有用であると考えられる。

表2の谷（2006）および谷（2008）は，吉田ら（2000）などを参考に，公共の場における迷惑行為として乗車場面に焦点をあてた項目群となっている。また，表2の原田・吉澤・吉田（2009）も吉田ら（2000）などを参考にしているが，こちらは電車内での場面を中心としながらも，ゴミの分

別、歩道や店舗付近での行為、駐輪、授業時のおしゃべりなど、少ない項目数で社会的迷惑行為をできるだけ幅広く網羅するよう配慮されている。

このように、社会的迷惑行為の測定項目は、項目数を絞る方向へと推移してきており、研究の目的に応じて、広範な迷惑行為をカバーするという方向性と、乗車場面など特定の状況に焦点をあてるという方向性が併存していると言える。

3. 社会的迷惑行為の測定方法

表3は、社会的迷惑行為に関する研究における迷惑行為の測定方法を示したものである。

これによると、社会的迷惑行為の指標は、主として次の5つに分けられる。「迷惑認知（自己）」とは、それぞれの社会的迷惑行為について回答者自身がその行為をどの程度迷惑と感じるかを尋ねるものである。「迷惑認知（他者一般）」とは、それぞれの迷惑行為について、他者や社会一般の人たちはその行為をどの程度迷惑と感じると思うかを回答者に尋ねるものである。社会的迷惑行為に関する研究において、迷惑認知を自己と他者に分けて測定するのは、“他者は迷惑と感じるだろうが、自分はそれほど感じない”という場合や、逆に、“他者は迷惑と感じないだろうが、自分は甚だ迷惑だ”、あるいは“他者も迷惑と感じるだろうし自分も迷惑だと思う”という場合が想定されるからである。迷惑認知は、従属変数すなわち社会的迷惑行為の指標として使用されることもあるが、後述する「迷惑経験頻度」などの従属変数に影響を及ぼす独立変数として扱われる場合もある。

「迷惑行為許容度」とは、それぞれの迷惑行為について、回答者自身がその行為を許容できる程

度を尋ねるものである。後述する「迷惑経験頻度」に比べて質問が間接的であり、社会的望ましさの影響をある程度抑えることができるという利点がある。

「迷惑経験頻度」は、回答者自身がその迷惑行為をどの程度経験（実行）したのかを尋ねるものであり、社会的迷惑行為の体験頻度をストレートに問いかけるので、はたして事実を忠実に反映した回答が得られるのかという懸念がつきまとう。したがって、社会的望ましさの影響、すなわち、回答者の回答に対する抵抗感に配慮する必要がある。

「迷惑対処法」とは、それぞれの社会的迷惑行為に対して、どのように対処したら良いと思うかを尋ねるものである。

4. 社会的迷惑行為に影響する心理的要因

表4～表7は、社会的迷惑行為に関する先行研究を概観したうえで、主な研究の概要を示したものである。これを見ると、これまでの研究で社会的迷惑行為との関連が検討された心理的要因は、「社会的態度・価値観」、「共感性」、「自己意識」、「自己制御」、「羞恥心・恥意識」の5点に大別される。

「社会的態度・価値観」のカテゴリーに該当するのが、斎藤（1999）、吉田ら（1999）などにおいて検討された「社会考慮」および「社会認識」、そして吉田ら（2000）および石田ら（2000）が検討した「社会考慮」などである。その他にも、「信頼感」（吉田ら、2000）、「社会志向性」（出口、2004）などが「社会的態度・価値観」に含まれる。

ここで言う社会考慮とは、“個人の生活空間を

表3 社会的迷惑行為に関する研究における迷惑行為の測定方法

迷惑行為の指標	測定方法
迷惑認知（自己）	回答者自身が、その行為をどの程度迷惑と感じるかを尋ねる
迷惑認知（他者一般）	他者や一般の人たちが、その行為をどの程度迷惑と感じると思うかを尋ねる
迷惑行為許容度	回答者自身が、その行為を許容できる程度を尋ねる
迷惑経験頻度	回答者自身が、その行為をどの程度経験（実行）したのかを尋ねる
迷惑対処法	そのような行為に対して、どのように対処したら良いと思うかを尋ねる

「社会」として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度”と定義される(斎藤, 1999; 吉田ら, 1999)。また、社会認識とは“法律や規則が社会の中で果たす役割、他者との協力・連携、利己的な行動や個人の権利が社会の中で持つ意味などをどのように認識しているかというものである(吉田ら, 1999)。快適で暮らしやすい社会を維持するにはどうすべきかを考える際に、法律や規則などの制度的側面を重視するのが「規制的社会認識」、他者との協力・連帯などの対人的側面を重視するのが「共生的社会認識」、社会に対して利己的で無関心であるのが「利己的社会認識」である(吉田ら, 2000)。

例えば、斎藤(1999)では社会考慮と迷惑認知の関係、社会考慮と迷惑対処法との関係を検討している。それによると、社会を考慮する人ほど「ルール・マナー違反行為」に対して迷惑を認知しており、放任という対処法はとらない。社会認識と迷惑認知との関係では、どのような迷惑であれ他者に配慮することや規制社会を志向する者ほど迷惑だと認知する傾向が強いことが示された。

また、石田ら(2000)は社会考慮と“迷惑だと感じる人の割合推定”などが迷惑認知に及ぼす影響について検討した。その結果、ある行為を迷惑であると認知するには、単に自分の快・不快という個人的な視点だけでなく、周囲の他者や社会全体への影響を考慮する視点(社会的影響性)や、自分以外の多くの他者も迷惑と感じているという判断(社会的合意性)が必要であることが示された。

さらに、吉田ら(1999)では、社会考慮の高い学生は迷惑行為を許容しない傾向が示された。このほか、社会志向性の高さが迷惑認知に影響することが見出されている(出口, 2004)。このように、社会考慮や社会認識、社会志向性といった「社会的態度・価値観」が迷惑認知および一部の迷惑許容度に影響することが分かっている。

「共感性」は、一般に向社会的行動との関連が指摘されており、多くの研究でそれが実証されている。社会的迷惑行為との関連を検討した研究もみられる。例えば、戸田・小林(2007)は共感性

と社会的迷惑行動の推測生起頻度との関係を検討しているが、両者は関連しないことを明らかにしている。また、谷(2008)も共感性が公共場面における迷惑行為の生起に影響しないことを示している。この他にも共感性と社会的迷惑行為との関連を検討した研究はあるが、いずれも、明確な関連性を示す結果は得られておらず、したがって、共感性と迷惑行為の認知や迷惑行動の経験頻度とのあいだには関連性がないと言える。

「自己意識」と社会的迷惑行為との関連を検討した研究も見られる。例えば、出口(2004)では、自己意識特性と社会的迷惑行為の頻度および認知との関連を検討している。その結果、公的・私的の自己意識特性と社会的迷惑行動の認知、頻度との間の直接的な関係は見出されなかった。また、セルフ・フォーカスおよび自己意識特性と社会的迷惑行為の認知との関連を検討した廣岡・矢神(2004)によると、セルフ・フォーカスが高まった観察者は観察した社会的迷惑行為を迷惑であると認知しやすいという仮説は立証されなかった。

このように、自己意識特性や自己への注目(セルフ・フォーカス)といった要因は、社会的迷惑行為と関連しないことが示されている。

「自己制御」と社会的迷惑行為の関連について検討した原田ら(2009)は、社会的迷惑行為を行う者には迷惑行為を迷惑と認知せずに実行する者と、迷惑と認知して実行する者の2タイプが存在し、大部分は後者が占める点に注目して、彼らが迷惑行為を行ってしまう心理を次のように推定した。すなわち、その行動が社会に受け入れられないと分かっているにもかかわらず自己中心的な考えを優先し、それを制御することができずに行動してしまうため、自己制御が関与しているタイプの行為者であると考えた。そして、調査によって、気質レベルよりも能力レベルの自己制御のほうが社会的迷惑行為を抑制すること、などを実証した。この研究は、自己制御という媒介変数を導入することによって、社会的迷惑行為の特徴でもある迷惑の自己認知と他者認知のあいだのズレが社会的迷惑行為の生起に影響することを論理的に示したという点で特筆すべきものがある。

表 4 社会的迷惑行為に関する主な研究の概要 (その1)

著者 (発表年)	調査対象者 実験参加者	独立変数 (多数の場合は主なものを記載)	従属変数	【仮説】または検討の対象 となった諸変数の関係性	仮説の 立証	明らかになった諸変数間の関係
1 斎藤 (1999)	大学生 短大生	社会考慮 社会認識	迷惑認知 迷惑対処	社会考慮と迷惑認知との関係、 社会考慮と迷惑対処法との関係 を検討。		社会を考慮する人ほど「ルール・マナー違反行為」 に対して迷惑を認知しており、放任という対処法 はとらない。 社会認識と迷惑認知との関係では、どのような迷 惑であれ他者に配慮することや規制社会を志向す るほど迷惑だと認知する傾向が強い。
2 吉田ら (1999) 研究 I	大学生 短大生	個人特性 統制の所在 社会意識 集団主義 権威主義 価値観など	迷惑行動 の認知 (他者認知 個人認知)	社会的迷惑行為に関して人々 が持っている認知構造、迷惑 度の自己認知と他者認知のズ レ、迷惑認知と個人特性の関 連などについて検討。		社会的迷惑行為が「ルール・マナー違反」および 「周りの人との調和を乱す行為」に分類されるこ とを示した。 社会的な事象に関心をもち、規範意識が強く、博 愛的な人生観や道徳的な人生観を持つ人ほど「ルー ル・マナー違反」を迷惑と認知する傾向がある。 権威主義的な人ほど「周りの人との調和を乱す行 為」を迷惑と認知する傾向がある。 自分が感じる迷惑度よりも、他者が感じる迷惑 度の迷惑度のほうが高く評定される傾向がある。
吉田ら (1999) 研究 II	大学生 大学院生 及び その母親	社会考慮 社会認識	迷惑行為 に対する 許容度	一般的な社会状況における迷 惑行為に対し、特定状況(結 婚式と葬式)における迷惑行 為と、社会考慮、社会認識と の関連性を検討。		母親では規制あるいは共生的社会認識が高い者 は迷惑を許容しない傾向があり、学生では社会考 慮高群が迷惑を許容しない傾向がある。 社会考慮は規制的社会認識や共生的社会認識とは 正の相関を、利己的社会認識とは負の相関を持つ ことが、母親において確認された。 社会認識と迷惑行為の対処方略の関連は確認され なかった。 社会考慮と対処方略は、学生においてのみ関連が あり、社会考慮の低い者が放任的対処をとったり 無関心であることが示された。
3 石田ら (2000)	社会人	迷惑だと 感じる人の 割合推定 社会考慮	迷惑認知 の根拠			ある行為を迷惑であると認知するには、単に自分 の快・不快という個人的な視点だけでなく、周囲 の他者や社会全体への影響を考慮する視点(社会 的影響性)や、自分以外の多くの他者も迷惑と感 じているという判断(社会的合意性)が必要であ ることが示された。

表 5 社会的迷惑行為に関する主な研究の概要 (その2)

著者 (発表年)	調査対象者 実験参加者	独立変数 (多数の場合は主なものを記載)	従属変数	【仮説】または検討の対象 となった諸変数の関係性	仮説の 立証	明らかになった諸変数間の関係
4 吉田ら (2000)	大学生 社会人	社会考慮 信頼感	迷惑認知 迷惑許容度 経験頻度	迷惑対処 ① 高社会考慮・高信頼感 社会のことを意識しており 他者を信頼しているため、 共生的な社会認識を持つ。 ② 高社会考慮・低信頼感 社会のことを意識しているが 他者を信頼していないため、 規範的な社会認識を持つ。 ③ 低社会考慮・低信頼感 社会のことを意識せず他者 を信頼することもないため、 利己的な社会認識を有して いる。 ④ 低社会考慮・高信頼感 社会のことを意識していな いが他者を信頼しているた め、楽観的な社会認識をし ている。 以上の社会考慮や信頼感 によって、迷惑認知、迷惑 許容度、迷惑行為経験頻度、 有効であると考える対処方 略が異なることを明らかに する。	①△ ②× ③○ ④○	迷惑認知、許容度については、迷惑行為によって 社会考慮や信頼感の関連の仕方は異なり一貫した パターンは確認されなかった。半数の迷惑行為に ついては、迷惑認知と許容度が社会考慮や信頼感 と関連しなかった。 いずれの迷惑行為についても、行為の経験と社会 考慮、信頼感との関連は認められなかった。 社会考慮の高低のみが、迷惑行為に対する対処方 略の違いに影響を与えていた。社会考慮の高い者 は、啓蒙や教育などの共生的な対処が必要だと考 えており、社会考慮の低い者は放任的かつ無関心 であることが示された。
5 廣岡 矢神 (2004)	大学生	セルフ・ フォーカス (有無)	迷惑行為 の認知	① セルフ・フォーカスが高 まった観察者は、観察した 社会的迷惑行為を迷惑であ ると認知しやすい。 ② 自己意識特性が高い人の ほうが低い人よりもセルフ・ フォーカスが高まった状況 で観察する迷惑行為をより 迷惑であると感じやすい。	①× ②×	
6 出口 (2004)	大学生 短大生	社会志向性 個人志向性	迷惑行為 の認知 (自己認知)	迷惑行為 の頻度		公的・私的自意識と社会・個人志向性は、迷惑認 知と頻度との関連性に影響を及ぼしている。公的・ 私的自意識と迷惑認知、頻度との間の直接的な関 係は見られず、迷惑認知に対する社会志向性の主 効果のみが示された。

表 6 社会的迷惑行為に関する主な研究の概要 (その3)

著者 (発表年)	調査対象者 実験参加者	独立変数 (多数の場合は主なものを記載)		従属変数	【仮説】または検討の対象 となった諸変数の関係性	仮説の 立証	明らかになった諸変数間の関係
		迷惑性 (迷惑高 認知場面/ 迷惑低 認知場面)	迷惑行為 の実行				
7 小池 (2004)	大学生 短大生	迷惑行為者 との関係性 (身近な他者 見知らぬ他者)	性別	迷惑行為 の推測 (他者の 迷惑感 自己の 迷惑感)	① 迷惑低認知場面において は、迷惑性が高い者も低い 者も迷惑行為を実行する。 迷惑高認知場面では、迷惑 性の高い者は行為の実行頻 度が低くなり、迷惑性の低 い者は迷惑低認知場面と同 じく行為を実行する。 ② 迷惑性の高い者は、迷惑 低認知場面、迷惑中認知場 面、迷惑高認知場面の順に、 行為の実行頻度が低くなり、 迷惑性の低い者は場面に關 わらず行為の頻度が高い。	①× ②×	
8 谷 (2006)	大学生 大学院生	迷惑行為者 との関係性 (身近な他者 見知らぬ他者)	性別	迷惑行為 の推測 (他者の 迷惑感 自己の 迷惑感)			乗車時のマナーや荷物の持ち方に関する迷惑行為 では、見知らぬ他者よりも身近な他者との間で生 じる場合に迷惑感が低くなる。 身近な他者について、男性は女性よりも非社会的 行動に対する迷惑認知は低い。
9 戸田・ 小林 (2007)	大学生	迷惑行為 の認知 (一般認知 個人認知)	迷惑性	社会的 スキル	① 一般迷惑認知と個人迷惑 認知のどちらかが迷惑行動の 実行と関連があるかを検討。 ② 迷惑性と社会的迷惑行動 は関連しないことを検討。	① ②	① 一般的に迷惑だと認知していても自分は迷惑 と感せず迷惑行動をとってしまうことがある。 ② 迷惑行動の推測生起頻度と迷惑性、社会的ス キル、向社会的行動頻度とは何の関連もなかつ た。
10 小池・ 吉田 (2007)	大学生 専門学校生	迷惑性 (情動的迷惑性 認知的迷惑性)	状況依存的 な迷惑性	迷惑行為者 が仲の良い 友人か、 顔見知りか 程度	① 顔見知りからの行為を友人 人からの行為よりも迷惑と 認知する。 ② 特性としての迷惑性および 状況依存的な迷惑性の低い者 ほど行為を迷惑と認知する。 ③ 特性としての迷惑性よりも 状況依存的な迷惑性のほう が迷惑認知に強く影響する。 ④ 行為者が顔見知りである 場合よりも行為者が友人で ある場合のほうが、状況依 存的な迷惑性が高い。	①○ ②△ ③△ ④○	

表 7 社会的迷惑行為に関する主な研究の概要 (その 4)

著者 (発表年)	調査対象者 実験参加者	独立変数 (多数の場合は主なものを記載)		従属変数		【仮説】または検討の対象 となった諸変数の関係性	仮説の 立証	明らかになった諸変数間の関係
11 谷 (2008)	大学生 大学院生	共感性 (共感的関心) (気持ちの想像)	迷惑場面に 身近な他者 がいるか、 いないか	他者の 迷惑感の 認知	迷惑行為 の生起頻度	【仮説】または検討の対象 となった諸変数の関係性		明らかなった諸変数間の関係 共感性は公共場面における迷惑行為の生起に影響 しない。 他者の迷惑感の認知が高いほど迷惑行為は抑制さ れる。 男性では身近な他者の在・不在は迷惑行為の生起 に影響しないが、女性では周囲に身近な他者がい る時よりもいない場合のほうが迷惑行為の頻度が 高くなる。
12 原田ら (2009)	高校生 大学生	自己制御 (気質レベル)	自己制御 (能力レベル)	迷惑行為 の認知	迷惑行為 の頻度			① 気質レベルよりも能力レベルの自己制御のほ うが社会的迷惑行為および逸脱行為を抑制する。 ② 自己抑制能力が低く、自己主張能力のみが高 いと逸脱行為に結びつきやすい。
13 中村 (2010)	大学生	恥意識	仲間集団 の規範性	仲間集団 との同一視	社会的迷惑 行為・逸脱 行為に対す る許容性	① 自分恥と他人恥は社会的 迷惑行為・逸脱行為に対し て抑止的に影響する。 ② 規範意識の低い仲間集団 に同一視している者におい ては、仲間恥が社会的迷惑 行為・逸脱行為に対して促 進的な影響を及ぼす。	①○ ②△	
14 中村 (2011)	大学生	恥意識	仲間集団 の逸脱性	仲間集団 との同一視	社会的迷惑 行為・逸脱 行為に対す る許容性	① 仲間恥が社会的逸脱行為 の許容性を促進する。 ② 仲間恥が向社会的行動へ の志向を抑制する。	①○ ②○	

一方、「羞恥心・恥意識」と社会的迷惑行為との関連について検討した中村（2010；2011）によると、恥意識はその種類によって社会的迷惑行為に対する影響の仕方が異なる可能性があるという。すなわち、「自分が決めたことを守れなかったとき」に感じる恥ずかしさのように、自らの行為を省みた際に生じる恥意識（自分恥）と、「自分の行動が社会一般・他者の常識やルールと一致しないときに生じる恥意識（他人恥）は、社会的迷惑行為に対する許容性の低さと関連し、「親しい仲間たちと趣味や好みが合わなかった時」に感じる恥ずかしさのように、身近な仲間集団と自らの考えや行動との間にズレが生じたときに感じる恥意識（仲間恥）は社会的迷惑行為に対する許容性の高さに関連する可能性を調査によって見出している。仲間恥が社会的迷惑行為に対して促進的に影響する心理過程については、その背景に、青少年における仲間への同調傾向および大人社会が作り出した常識や規範への反発心があることを指摘している。どのような仲間集団に同調するのかによって、仲間恥の社会的迷惑行為に対する影響の仕方も異なると考えられる。この点も含めた研究の進展が期待される。

5. 社会的迷惑行為に関する研究の課題

本稿では、社会的迷惑行為に関する主な研究を概観し、その定義、内容（測定項目）、測定方法、関連する心理的要因を分類・整理した。これまでの研究で社会的迷惑行為との関連が明らかになった心理的要因は、社会的態度・価値観、自己制御、羞恥心・恥意識などに大別される。これらを踏まえて、社会的迷惑行為に関する研究の課題について考察する。

① 社会的迷惑行為に影響する新たな心理的要因の検討

これまでの研究によって、共感性、自己意識特性、社会的スキルといった広義のパーソナリティ特性は、社会的迷惑行為に関連しない、あるいは明確な関連性はないことが明らかになった。その

一方で、社会的態度・価値観、自己制御、羞恥心・恥意識などは社会的迷惑行為に影響する要因であることが分かってきた。今後の課題として、これらの心理的要因が社会的迷惑行為に及ぼす影響についてさらなる詳細な検討が望まれると同時に、その他にも社会的迷惑行為に影響する心理的要因があるかどうかを検討することが挙げられる。例えば、本稿の前段では触れなかったが、尾関・吉田（2007；2009）は、大学の部活動やサークルといった集団内での迷惑行為の認知や生起に組織風土、集団アイデンティティが及ぼす影響を検討しており、関連性を示唆する結果を見出している。これらの研究が対象とした迷惑行為は、本稿が目にした公共場面で不特定多数の人々が居合わせる状況下での社会的迷惑行為とは異なるものの、社会的迷惑行為が組織や集団内での相互作用過程で生起することを示しており、新たな心理的要因を探るうえで大いに参考になると思われる。

② 社会的迷惑行為に影響する要因の背後にあるものとは？

先に述べた通り、社会的迷惑行為に関する研究は、1990年代後半頃から公共の場における迷惑行為が増加したことを契機に行われるようになった。これまでの研究によって、社会的迷惑行為に影響する心理的要因が次第に明らかになってきたが、これらの心理的要因はなぜ1990年代後半以降に影響を及ぼすようになったのだろうか。それ以前とそれ以降では何が異なるのだろうか。今後は、大学生や社会人のみならず、児童生徒をも対象にして家庭における躰げや学校教育の影響を考慮し、これらの心理的要因が社会的迷惑行為に対して促進的な影響を及ぼすことになった社会的背景やそれらを媒介する別の心理的要因を検討する試みも必要であると考えられる。そのためには、次に述べるマクロな視点からの検討が期待される。

③ 社会的迷惑行為をマクロな視点から検討する意義

社会的迷惑行為に関する研究の先駆けとなった吉田ら（1999）は、社会的迷惑行為が蔓延した背

景として、社会規範が遵守されにくい社会環境になったことと、そもそも人々に社会規範が共有されなくなったことの2点を挙げている。これは、社会的迷惑行為の増加を大局的な見地から唱えたものであるが、先述の通り、研究のパラダイムは社会的迷惑行為に影響する心理的要因の探求へと急速に移行したために細分化が進み、この大命題が置き去りになってしまったとの印象は拭いがたい。今後は、さまざまな立場から社会的迷惑行為に関する研究が展開されつつも、先の大命題に帰されるような研究知見の統合にも期待したい。

④ 社会的迷惑行為の抑止・防止を促すための取り組みや働きかけに関する研究の必要性

社会的迷惑行為に影響する要因が明らかになれば、当然の帰結として社会的迷惑行為を抑止する方策やその手掛かりが得られると思われるが、今後は、先行研究の知見を応用した社会的迷惑行為の効果的な抑止策を直接検討する試みも必要であると考える。こういった試みは、例えば、北折・吉田(2000a; 2000b)が違反抑止メッセージや記述的規範が社会的逸脱行動に及ぼす影響を検討した研究などで見られるが、あまり多くはない。研究成果の社会への還元という意味からも、社会的迷惑行為を抑止するための取り組みや働きかけに関する研究は重要である。

参考文献

- 出口拓彦 2004 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連 公的・私的自意識および社会・個人志向性に着目して 藤女子大学紀要 第42号 第II部 59-64.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 2009 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響——気質レベルと能力レベルからの検討—— 実験社会心理学研究 第48巻 第2号 122-136.
- 廣岡秀一・矢神祥代 2004 自己フォーカスが携帯電話使用時の社会的迷惑認知に及ぼす効果 三重大学教育学部研究紀要 第55巻 教育科学 49-62.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 2000 社会的迷惑に関する研究(2)——迷惑認知の根拠に関する分析—— 名古屋大学教育学部紀要(心理人間発達科学科), 47, 25-33.
- 北折充隆・吉田俊和 2000a 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響——大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験—— 実験社会心理学研究 第40巻第1号 28-37.
- 北折充隆・吉田俊和 2000b 記述的規範が歩行者の信号無視行動に及ぼす影響 社会心理学研究 第16巻第2号 73-82.
- 小池はるか 2004 共感性と対人的迷惑行為実行との関連——迷惑高認知場面と迷惑低認知場面の比較—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 51, 233-240.
- 小池はるか・吉田俊和 2007 共感性と対人的迷惑認知、迷惑認知の根拠との関連——行為者との関係性による違いの検討 パーソナリティ研究 第15巻第3号 266-275.
- 中村 真 2010 恥意識が社会的迷惑行為および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響——規範意識が低い仲間との不一致に起因する恥意識は社会的逸脱行為を促すのか—— 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集 114.
- 中村 真 2011 恥意識が向社会的行動および社会的逸脱行為の促進・抑制に及ぼす影響——仲間との不一致に起因する恥意識は向社会的行動を抑制し、社会的逸脱行為を促進するのか—— 日本パーソナリティ心理学会第20回大会発表論文集 116.
- 尾関美喜・吉田俊和 2007 集団内における迷惑行為の生起及び認知——組織風土・集団アイデンティティによる検討—— 実験社会心理学研究 第47巻第1号 26-38.
- 尾関美喜・吉田俊和 2009 集団アイデンティティが集団内における迷惑の認知に及ぼす効果——成員性と誇りの機能的差異に着目して—— 実験社会心理学研究 第49巻第1号 32-44.
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集 第24号 67-77.
- 谷 芳恵 2006 乗車場面における非社会的行動——青年の迷惑観の認知を中心に—— 神戸大学発達科学部研究紀要 第14巻第2号 13-19.
- 谷 芳恵 2008 共感性が公共場面における迷惑行為に与える影響 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 第2巻第1号 7-12.
- 戸田まり・小林亜希子 2007 大学生の社会的迷惑に関する検討 北海道教育大学紀要(教育科学編) 第57巻第2号 31-40.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 53-73.
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 2000 社会的迷惑に関する研究(3)——社会的考慮と信頼感による人の分類と迷惑行為との関連—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 35-45.